
1 3歳たちの末路

おがくず亮介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

13歳たちの末路

【Nコード】

N5678Q

【作者名】

おがくず亮介

【あらすじ】

愚かな13歳の少年たちは、もはや自らを制御できなかった。

First

1月6日。

日本列島に爆弾低気圧が直撃した影響で、外は吹雪き、窓ガラスが鳴っている。

親友の雄吾から電話がかかってきたのは、その日の午前のことだ。

「今日、暇？」

「暇だけど」

「今から遊ばね？」

「外見てよ。めちゃくちゃ吹雪いてるじゃん。行けねーよ」

「じゃあ俺が向かえに行く。家の前のT字路まで出てきて」

「寒いから嫌……」

「じゃあな」

一方的に電話を切られてしまった。

仕方なく、渋々僕は学ランに着替えた。

こんな時に出かけるなんて言ったら、僕は馬鹿だと思われてしまう。

実は今日は登校日でした、ということを親に告げ、手袋とダウンジャケットを身に纏って外へ出た。

ごうごうと鳴る風は冷たくて痛い。

真冬日という天気予報も頷ける。

僕は言われた通りにT字路に出て、老夫婦が営む小さな商店の軒下で雄吾を待った。

雪は物凄い速さで横に流れていく。

近くのシャッターが鳴る。

そのただただ単調なハーモニーを裂いて、車の音がした。

しかし、大型車の音、除雪車だ。

これだけ雪が降れば出動するのも当然である。

僕は雄吾の家の車を思い浮かべてため息をついた。

確か、白い軽自動車だったな。早く来いよ。顔中が霜焼けになりそうだ。

そう思っていると、その除雪車が僕の前で止まった。

「俊輝、乗れ！」

ドアが開き、僕はぎよつとした。

除雪車を運転していた人物はフルフェイスヘルメットを被っていたが、まさしくそれは雄吾だった。

「雄吾……、何やってんだよ！」

「いいから早く！」

雄吾に急かされ、僕は除雪車に乗った。

乗ってしまった。

「ねえ、本当に雄吾なの？ 何で雄吾が運転してるの？」

「後で話すから、とりあえずこれ被れ」

僕はもう一つのフルフェイスヘルメットを渡されるがままに被った。

「どっちも俺のだから大丈夫」

「そんなこと訊いてないよ」

しばらく、僕と雄吾の間にそれ以上の会話は無かった。

Second

雄吾はどんだん山の方へ除雪車を走らせる。

家や人気はほとんど無い。

同じ町内とはいえ、僕のあまり知らない地区だ。

幅員が狭くなるにつれ、僕の不安は増幅されていく。

雄吾は何も喋らず、運転に真剣だ。

すると突然、左へハンドルを切り、土手のような道を下ると、雄吾は除雪車を止めた。

「つてか離せよ」

気付けば、僕は雄吾の背中にしがみついていた。

「降りていいぜ。ここに来たかったんだ」

僕は太ももほどの高さの雪の中へ飛び降りた。

目の前には大型の倉庫が4つ、うち1つのシャッターが開いている。

除雪車の格納庫だとすぐに分かった。

雄吾は、ここから除雪車をパクってきたんだろう。

「一昨日さ、こんなのが落ちてたんだよ」

雄吾も除雪車から降り、ポケットから取り出した鍵を僕に見せた。

キーホルダーには『除雪シャッター1』とペンで記されている。

「それでここに来てみたらビンゴ！　ってわけ」

雄吾はヘルメットのバイザーを上げた。

「捕まるよね……？」

ヘルメットを脱いだ僕は震えていた。

「バレたら捕まるよね？」

「だからこうやってヘルメットを……」

「馬鹿！ 何でこんなことしたんだよ！」

「……白けてるな、俊輝は」

雄吾はため息をついてそう言った。

「バレるわけじゃないじゃん。こんな山奥だぜ？」

「そんなの分からないだろ」

「いいから、ほら、俊輝も動かしてみろよ。楽しいぞ」

誘惑され迷いが生じる。

確かにここは山奥だ。人気もない。

けど、100%人が来ないとも言えないと思うけど……。

開いている格納庫には、もう一台除雪車がある。

確かに、こんなチャンスはもう二度とないかも……。

「……ちょっとだけなら」

雄吾は、にっと笑って、

「オッケー。早く早く！」

と手招きした。

僕は雪を踏みしめながら、一步一步近付いていく。

実は、憧れだった。

ショベルカーとかブルドーザーとか、大きい乗り物を動かしてみたかった。

僕は小柄だから、そういう願望も強いかもしれない。

まるでロボットを動かすみたいにドキドキしたまま運転席に浅く腰掛けた。

雄吾がエンジンを点けると、眠っていた除雪車が息を吹き返した。

一通り運転の方法を覚えてもらい、僕はギアを一速に入れアクセルを踏んだ。

太いタイヤが回り、チェーンがコンクリートを引っ搔く。

上下に跳ねながら進むのがちょっとカッコ悪いけど、その振動が快感だ。

ギアを二速に入れようと視線を下ろした時、雄吾が叫んだ。

「俊輝、前！」

はっとして前を見ると、雄吾が運転していた除雪車が横を向いて停められている。

僕は慌ててブレーキを踏んだが間に合わなかった。

派手な音を立てて衝突し、僕はハンドルに胸部を打ち付けて、苦しめて唸った。

ヘルメットの中で咳と荒ぐ呼吸がこだまする。

「大丈夫？」

慌てた雄吾が僕の背中をさすった。

「痛い……、けどすごく楽しい」

Third

その時、僕たちは聞いてしまった。

唸るように鳴り響く。パトカーのサイレン。

それは確実に僕たちの方に近付いている。

一気に血の気が退く。

「ゆ、雄吾……」

その先の言葉が出てこない。

雄吾は舌打ちをすると、あることを提案した。

「こいつで逃げよう」

「いっしょ？」

「除雪車だ。でかいから何とかなるだろ」

そして、啞然とする僕を置いて続けた。

「二手に別れて警察から逃げるんだ」

「無理に決まってるだろ！ 絶対に捕まっちゃうよ……」

「捕まりたくないなら逃げろ！」

叫ぶように言い残して雄吾は自分の除雪車に乗り込んだ。

「雄吾！ 逃げるのやめようよ！」

雄吾には届かない。

僕は怖い。

狂った雄吾も、警察からの逃走も何もかも怖いよ。

いよいよパトカーが僕たちの前に停まり、警官二人が僕たちに言った。

「通報を受けてやってきた！ 馬鹿な真似はよして早く降りろ！」

だが雄吾はお構い無しだった。

雄吾の除雪車は向きを転換すると、急加速して前輪をパトカーと接触させた。

フロント部分が凹む。

そのまま雄吾は逃走を始めた。

僕ももう後には退けなくなった。

思いきって発車した。

どうにでもなれ。

「止まれ！ ガキ共！」

警官の怒号のような罵声が響く。

「こちら6号車、現在2台のブルドーザーが呼び掛けを無視して逃走中！ 大至急応援要請願います！」

「こちらT県警、了解。犯人はどんな人物か？」

「ヘルメットを被っていて顔は確認できませんでしたが、おそらく中学生か高校生だと思われます」

「了解。6号車、追跡を続行願います」

F o u r t h 一 俊 輝 s t u r n .

前を走る雄吾の除雪車のウインカーが、左折の合図を出した。

ここを右へ曲がれば、初めに来た道に戻っていくことになり、町の中心部の方に行ける。

僕はハンドルを右に回した。

しかし車の大きさが掴めず、角にあった『止まれ』の標識を後輪がなぎ倒し、車体の右側に当たった。

雄吾は、よくこんな車を運転できたな。

僕は冷や汗をかきながらそう思った。

道幅が狭い上に下り坂、おまけに左は崖だ。

少しでもスリップしたら、錆びた背の低いガードレールの向こう側へ行ってしまうだろう。

幸い、という言い方もおかしいが、あのパトカーは雄吾の方を追った。

しばらくは少し安心して運転できる。

僕はできるだけ車体を右側に寄せた。

ところがその時だった。

「うわあっ！」

突然車体が揺れた。

何かにぶつかったような衝撃で、僕は悲鳴を上げて停車した。

吹雪でよく見えなかったが、少し身を乗り出すようにして前方を見る。

排雪板に、軽トラックが激突したのだ。

フロントガラスは粉々になっている。

僕はぞっとして、一旦除雪車を降りた。

そして軽トラックの運転手の口に耳を当て、手首に触れた。

呼吸も脈もない。

頭部は流血している。

僕が、やったの……？

謔言を喋るように口が勝手に動いた。

違う。

違う違う違う違う違う。

僕はやってない。

あっちが勝手にぶつかってきたんだ。

僕は悪くない。

殺してない……！

僕は除雪車に乗り込むやいなや、アクセルを乱暴に踏み込んだ。

排雪板に押されて軽トラックは横転し雪の上を滑る。

運転手がどうなったかなんて想像もしたくない。

スクラップと化した軽トラックを、最後は踏み潰した。

F o u r t h 一 雄 吾、 s t u r n.

「止まりなさい！」

雄吾の後ろから命令する警官。

雄吾には当然、止まる気などさらさらない。

走れば走るほどに雪が強く降ってくる。

積雪も尋常ではなく、パトカーでは走行が困難になってきた。

雄吾は敢えて排雪板を上げたまま走った。

雪を掻かなければ、こっちに分がある。

チェーンを巻いたタイヤは力強く重い車体を動かす。

しかし、このまま走るとどこに着くのか雄吾は知らない。

「おい、何をしてる！」

助手席に乗る警官がいきり立つ。

「駄目です！ 前に進みません！」

運転する警官が苦い顔をする。

アクセルを踏んでもタイヤが徒に回るだけで、いよいよ追跡が出来なくなった。

少しバックして勢い任せに雪に突っ込むが、結局はスタックしてしまふ。

ハンドルを左右に切っても、一切のレスポンスが無い。

「ど、どうしましょう？」

「四駆なのにスタックするのか……」

追っている除雪車が小さくなっていく。

「停まった。バーカ、そんなパトカーなんかには捕まるわけないだろ」

雄吾は高笑いした。

Fifth — 俊輝's turn.

山道を下り続けていると、いつしか雪は少し小降りに変わっていた。

僕は動悸が止まらなかった。

ハンドルを握る手が震え、カーブが連続する道なのに、どういいうわ
けかアクセルを踏みすぎる。

背後から誰かに追われているような気がしてならない。

僕は不意に背後を振り返った。

誰もいない。

気のせいかな。

ところが、問題は前方で起こった。

サイレンとともに、パトカー三台が僕の方へ走ってきている。

僕は思わず急ブレーキを踏んだ。

前輪がロックされ、下り坂をスリップする。

止まらない。

目の前は崖、鳥肌が立つ。

岩壁に車体を打ち付けてでも止めようとハンドルを右に切る。

その瞬間、除雪車はスピンした。

排雪板が音を立てて岩壁と接触し、ようやく止まった。

死こそ逃れたものの、すぐそこにパトカーはいた。

僕は道を塞がれ立ち往生した。

「早く降りろ！」

万事休す。

避けられる道幅などない。

警官たちが、あっという間に僕の除雪車を取り囲んだ。

「な、何だこれは？」

一人の警官が声をあげた。

後輪に巻き付いたチェーンに付着していた、肉片と血。

「人を轢いたのか？」

僕は頭が真っ白になった。

まさか証拠が残っていたなんて……。

こうなったら……！

僕は意を決してアクセルを踏んだ。

ただしギアはニュートラル。

急に轟音が上がり、警官たちは後ずさる。

そして、ギアを一速に叩き込んだ。

「おい！」

何も僕を止められないよ。

お前たちに見せてやる。

除雪車はパトカーに乗り上げ、プレスした。

うち一台から炎上した。

僕は走り去る際にちらっと後ろを見た。

まもなくガソリンに引火するだろう。

やった、僕の勝ちだ。

F i f t h 一雄吾、s t u r n.

俊輝、うまく逃げてるか？

俺はなんとか振り切った。

そんなことを思いながら、雄吾は運転を止めていた。

猛吹雪に阻まれ、前に進めない。

暖房の出力を最大にし、温風に手をかざした。

「あったかいや……」

ふとそんな言葉が漏れた。

あったかい。

あの日も、寒いのにあったかかったつけ。

雄吾は、自販機のコーンポタージュが大好きだ。

家路の途中にその自販機があるから、よく買っていた。

何年か前の冬の日、今日みたいに雪が降りしきる日、雄吾は初めて俊輝と喋った。

「お前も、それ飲むんだ」

「うん……」

雄吾は、俊輝が両手で持つコーンポタージュを指差して言った。

ぎこちない2人。

無言のまま雄吾はコーンポタージュを飲んだ。

正直、鉢合わせしてしまったという心境だった。

俊輝は休み時間でもいつも一人でいたし、同じクラスだったが、プロファイルを何も知らなかった。

雄吾は缶の中身を飲み干すと、俊輝を一瞥した。

俊輝は雄吾をじっと見ていた。

雄吾は頭を掻いて、飲み口の裏にへばりついた粒コーンをどうにか舌で取ると、ゴミ箱に投げ捨てた。

そして、無言で立ち去るのも悪いと思い、雄吾は俊輝に告げた。

「冷めちゃうよ、せっかくあったかいのに」

「うん」

俊輝はそっと缶の蓋を開けた。

ほんの少し飲んで、口許から離す。

「お前、猫舌？」

雄吾は笑った。

つられるように俊輝ははにかんで、軽くうなずいた。

これが2人の最初のやりとりだ。

温風に当てている手を翻す。

すると、雄吾の目は涙を湛えた。

どうして俊輝を巻き込んだんだろうか？

俺、俊輝の人生、狂わせちゃったんだよな……。

次第に罪の意識が雄吾を苛む。

雄吾は暖房の出力を下げると、運転を再開した。

S i x t h 一 俊 輝 s t u r n .

ようやく少し開けた場所に出た。

僕は左折し、国道の方を目指した。

未だに道幅はそれほど広くないが、僕は道のと真ん中を堂々と走る。

当然、対向車は来る。

しかし僕はアクセルを緩めない。

対向車のドライバーがパニックを起こしたのか、スリップして半回転した。

次の瞬間、激しく衝突する。

さすがの除雪車も大きく揺れる。

胃の内容物が逆流しそうになる。

だが僕は快感で仕方がなかった。

雄吾、僕は感謝してるよ。

いくら感謝しようとしてもし尽くせないくらいにね。

やっと、僕は僕という存在を知らしめることができる。

今まで僕を省いてきたクラスの奴らに。

僕は重度の人見知りで、どうしてもクラスに馴染めなかった。

休み時間でも、じっと椅子に座ってた。

みんな、僕をいないものとして扱ってた。

だから僕の存在を示してやる。復讐してやる。

邪魔する物は消す。消してやる。

消してやる消してやる消してやる消してやる消してやる消してやる……！

その時、僕は耳をつんざくようなクラクションの音ではっと我に返った。

気付けば、そこは国道の交差点の上だった。

僕の目の前にある信号機は赤いランプを点している。

クラクションを鳴らしたのは路線バス、乗客も確認できた。

僕は当然旋回し、正面からバスにぶつかった。

相手が相手だけに、こちらが負うダメージも大きい。

そこかしこから悲鳴が上がっている。

僕は5メートルほどバックすると、急発進して再び体当たりした。

バスのフロントはスクラップさながらの様相を呈した。

何度も何度も、執拗に繰り返す。

僕に向かってクラクションなんか鳴らした罰だ。皆殺しにしてやる。

S i x t h 一雄吾、s t u r n.

上り勾配が続いた峠道も一旦落ち着きを見せた。

道幅は二車線分確保され、雄吾は少し肩の力を抜いた。

追われる身とはいえ、追っ手がすぐそこにいないとそれほど気は張らなくて済む。

しかし、問題はすぐに雄吾の目の前に現れた。

それが見えた瞬間、雄吾は目を見張った。

何十台ものパトカーが道を塞ぐバリアを作っていた。

実はこの道は、雄吾が走ってきた部分だけが峠道になっていて、後は割りと平坦な道のである。

先の警官の通報を受けてこの陣形を作るのに、それほど時間を要さなかった。

雄吾は立ち往生してしまった。

「ほら、観念しろ！」

警官の数も優に100を越していた。

今ここで除雪車を降りたら、20秒もしないうちに両手に手錠を掛けられてしまうだろう。

雄吾はパトカーを踏み潰して行こうとアクセルを踏もうとした。

その時、警官が一斉に雄吾に拳銃を向けた。

「強行突破しようというのなら、我々は子供だろうが遠慮しない」

撃たれたら、最期だ。

雄吾は落ち着きを失い頻りに唸る。

「くっそおおおおお！！」

雄吾はアクセルを踏んだ。

予告通り、警官が発砲する。

銃弾は何発かフロントガラスと排雪板、タイヤにも命中した。

雄吾は悲鳴を上げながら、ハンドルを左へ切った。

警官たちが驚く。

雄吾が選んだのは、何十年も前から使われていない旧道。

「追え！ 早く！」

雄吾は再び逃げる立場を自覚した。

整備も舗装もされていない雪道を強引に進むも、除雪車ですら走行は困難だった。

アクセルを踏んでもタイヤは空回りすることが多くなり、ついには

スタックしてしまった。

雄吾は焦ってハンドルを乱暴に左右に回す。

頼む、動いてくれ……！

しかしタイヤははまった雪から脱げ出せない。

雄吾の頭の中は完全にパニックだった。

S e v e n t h 一 俊 輝 ' s t u r n .

何十もの車を蹴散らしながら、わざと国道の反対車線を驀進していく。

路面に雪は皆無で、チェーンがアスファルトの上を進む音がやかましい。

街は混乱に陥っている。

僕はラジオの電源を付け周波数を合わせた。

「……たった今入ったニュースです。A町で少年の運転する除雪車が次々に車を跳ねて暴走中、なお犯行に使われている除雪車は……」

さらに別の放送局に回す。

「繰り返します。番組の途中ですが一部内容を変更し、A町で起きている事件について放送しております。ご了承ください」

「現段階で犯人の少年は2人と見られ、うち1人はY山をU市へ向けて逃走中との情報が入りました」

きっと雄吾だ。

うまく逃げてるんだな。

「少年による犯行ですか。こう言うてはなんですが、世も末ですね。何を考えてるんだか分かりません」

ラジオのMCが冷たく言い放った。

僕は強烈な憤りを覚えた。

何を考えてるんだか分かりません、だと？

分かつともしないくせに偉そうに……！

全身がわなわなと震える。

殺したい。

僕に逆らう奴ら全てを。

僕を理解しようとしないう奴ら全てを。

するとその時、僕は道を封鎖している集団に気付いた。

あの黒い盾を携えた集団は、テレビで何度か見たことがある。

機動隊だ。

退け。

僕は念じた。

しかし機動隊は幾重にも列を作ったまま微動だにしない。

徐々に迫っていく。

僕が人を轢く勇気もない臆病者だとも思っているのか。

子供だからって馬鹿にするな……！

心は苛立つが、しかし僕はブレーキを踏みつけていた。

強く踏みつけていた。

50メートルほど距離を置いて停車する。

何をやってるんだ、僕は。

これじゃあ奴らの思惑通りだ。

僕は乱暴にクラクションを鳴らした。

機動隊は毅然として動かない。

何で退かないんだよ！

カッコ悪いセリフを僕は叫んだ。

機動隊はじりじりと僕との距離を詰め始めた。

数えきれない人の波が押し寄せる。

ギアはニュートラルに入っただけのままアクセルを踏む。

だが奴らは僕をなめきっている。走れないだろうと高をくくっている。

何の威嚇にもならない。

だからといってギアを動かそうとすると手が止まる。

焦燥感が僕を襲う。

Seventh — 雄吾's turn.

雄吾は後退を試みる。

エンジンが苦しそうに唸り、何とか除雪車は動いた。

今度は轍を避けて進む。

少し進んだところで再び雪に嵌まる。

雄吾は苛立って、重苦しいヘルメットを脱いだ。

ハンドルにしっかりしがみついて、進めそうなラインを探す。

スタックする度にそうして、雄吾は精神的に参っていた。

確実に視野が狭くなったのが分かる。

その上、さっきから除雪車の挙動がおかしい。

右の舵が効きにくくなっている。

見ると、左の前輪が潰されていた。

警官が発砲した時に被弾し、今頃になってパンクしたのだ。

空気が抜けきって使い物にならない。

ますます苛立つ雄吾だが、何かにぶつかって除雪車は止まった。

運転席からではただの雪の塊にしか見えない。

雄吾は除雪車から降りてその正体を確認しようとした。

その瞬間、外はブリザードのように吹雪いた。

視界はホワイトアウトし、雄吾の降車を阻む。

ワイパーのスイッチを入れる。

全く効かない。

高速にしても外は全く見えない。

何もかもが雄吾を妨げる。

E i g h t h 一 俊 輝 s t u r n .

結局、僕はただの臆病者なのか。

違う。

絶対に、違う。

人ぐらい簡単に殺せる。

僕は変わるんだ。

僕はきつく目を閉じ、ついにギアを動かせた。

見なければ、いける。

程なくして僕の暗闇の世界に生々しく響く叫び声。

車体に、何か物がぶつかる。

怖い。

逃れるように僕はギアをシフトアップする。

突然、僕の右側の窓ガラスが割れた。

雪を乗せた寒気が入り込む。

しぶとくしがみついていた機動隊の1人が警棒で叩き割ったのである。

僕は舌打ちをして、ハンドルを右へ左へ回した。

除雪車は激しく蛇行し、たまらずその機動隊員は振り払われた。

固いアスファルトに背中から落下し、バウンドしながら転がった。

僕はその様を振り返って見ていた。

ざまあみろ。

そして前を向き直した時、僕は青ざめた。

大量の燃料を積んだトレーラーが目の前に停車している。

猛スピードで僕はガソリンスタンドに突っ込もうとしていた。

距離はもう10メートルも無い。

ハンドルを切る刹那さえも無く、僕はそっちに吸い込まれていく。

抗えない。

不意に脳裏に雄吾が浮かび、次の瞬間、僕はトレーラーに突っ込んだ。

瞬時に大爆発が起こり、ガラスが吹き飛び、周りが炎に包まれる。

僕は、あの時と同じように、ハンドルに胸部を打ち付けた。

激しい痛み。

呼吸が覚束なくなり、息が詰まりそうになる。

さらに僕は気付いた。

何も聞こえない。

爆発の音で鼓膜が破れてしまった。

熱い。

雄吾。

助けて。

熱いよ。

次々に給油スタンドに引火し、炎はますます勢いを強める。

僕は割れた窓ガラスから火の海へ這い出る。

ガラスの破片が手に刺さる。

そして力無く地面に落下し、意識も遠ざかっていく。

痛い。熱い。苦しい。嫌だ。死にたくない。

様々な感情がせめぎあう。

灼熱の炎に焼かれる中で、きっと僕は死んでゆく。

雄吾……。

でも、恨んでないからね……………。

E i g h t h 一 雄 吾、 s t u r n.

雄吾が走る旧道は、大正初期に既に開発を中断されていた。

元は谷底に小さな集落があつて、そこ市街地を結ぶ道になるはずだった。

しかし不思議な事に、工事中、事故が多発した。

落石や土砂崩れがしばしば起こり、命を落とす者も後を絶たなかった。

祟りだ、と口々に噂された。

というのも、その集落に住んでいたのは、太古から呪術を継承している家系として一部には大変有名だった。

迷信だと言われていたが、実はその道路開発に集落の長が強く反対していて、それにもかかわらず強引に工事を行ったのだ。

開発半ばで工事は中止、未舗装の道が今でも残っている。

後に、幅員が極端に狭い上に凹凸が激しく、車両が立ち入ると危険なので、通行止めを意味するガードレールが設置された。

雄吾がぶつかっているのは、まさにそれである。

しかしそんな事はつゆ知らず、除雪車は強引にガードレールを乗り越えた。

道は急な下り坂に変わり、狂ったようにスピードが上がっていく。

路面はうねり、雄吾は姿勢を制御するだけで精一杯だった。

凄まじい吹雪で前後も左右も分からない。

スピードメーターの針は40と50の間を振れている。

ぞっとした雄吾はブレーキを踏む。

すぐに異変に気付いた。

減速、できない。

間違いなく雄吾の左足はブレーキを踏んでいるが、全く止まる気配が無い。

まるで見えない力に引っ張られるように。

差し迫る崖が雄吾を手招いているように。

2秒後、除雪車は大きく左に傾いた。

左側は谷底だ。

雄吾は悲鳴を上げ顔を伏せた。

除雪車は斜面を横転し始めた。

ふわり体が浮き、狭い運転席中に体が叩き付けられ激痛が走る。

何度も頭を打ち、雄吾の意識は朦朧としていた。

どこが痛いのかも分からない。

でも体は動かなくなっていく。

力が入らない。

除雪車が滑り落ちる斜面は、なだらかな雪から荒れた岩場に変わった。

突出した岩に当たって回転の方向が変化し、除雪車の部品が次々に取れていく。

ああ、俺死ぬんだ……。

俊輝、悪かったな……。

頭から流血し、雄吾は気を失った。

それでもはや原形をとどめていない除雪車は、谷底の岩石へ突き刺さって、爆発した。

雄吾は二度と目を覚ますことは無かった。

Final episode

1月8日。

冬休みは終わり、学校は騒然としていた。

未成年の犯罪なので犯人の名前こそ公表されなかったが、昨日はどのテレビ局も例のニュースを大々的に報道していた。

少年2人による窃盗及び殺人事件。

片方の少年は国道を暴走しガソリンスタンドに突っ込み、もう片方の少年は旧道でハンドル操作を誤り谷底へ転落、最終的に2人とも遺体で発見された。

少年たちの末路は、『事故死』という、無機質で温もりのない三文字で世に知れ渡った。

ある評論家は、これを暴力的表現を含んだゲーム及びその他娯楽のせいだと、ここぞとばかりに得意気に批判した。

臭いものには蓋をしろ。

大人の社会に蔓延する、そんな狡猾な考えを端的にさらけ出した、
齒の浮くような批判だ。

ところが、世論はあまりに安直に流され、その評論家を正義だと考
え正当化する。

根本にある原因に向き合おうともせず、逃げる。

大人たちは既に答えを見失っている。

俊輝を煙たがって避けていた連中は、否でも応でも、大人を見て育
ったというのに。

俊輝と雄吾がいたクラスは、空席が二つあり、まるでお葬式のよう
に静まり返っている。

誰一人、言葉を交わさない。

そこへ中年の担任が入ってきた。

「赤羽 染谷」

俊輝と雄吾の名字を静かに告げる。

句読点を挟むには短い間を置いて。

「ニュースを見た奴がほとんどだと思うが、敢えて言う。……赤羽と染谷が亡くなった」

担任は声を震わせて続けた。

「一人一人責めるようなことはしない。だけど……、二人が死んだ責任は、間違いなく俺たちにある。そう考えている」

全員が俯いた。すすり泣く者もいる。

「いいか。陰湿な真似は絶対するな。クズな大人どもを見倣うな。……二人の死から何を学ばなきゃいけないかよく考えろ」

そう言い切ると、担任も嗚咽を漏らす。

日光に照らされた俊輝の机からノートが落ちた。

—
—
—
The
end.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5678q/>

13歳たちの末路

2011年11月14日05時46分発行